

世論調査における主体の構築

岡 本 裕 介

1 世論とその主体

本稿の目的は小さなもので、ミシェル・フーコーのいう「主体の構築」が、世論調査においてどのように行なわれているかについて考え、いくつかの論点を提出することである。

世論調査の読み手は、それを単なる反応の集積としてではなく、必ず1つまたは複数の主体的な意見として読み取ろうとする。その場合、読み手は主体的な意見がすでにあってそれを探り当てようと調査が行なわれたと考える。しかし、他方で、そのような主体が実体として存在することを前提とせず、読み手の作業を、多数の反応の集積から主体的な意見を構築していく作業として見ることもできるだろう。

フーコーは、1976年1月14日に行なわれたコレージュ・ド・フランスの講義のなかで、「少しずつ、徐々に、現実には、物理的に、身体、力、エネルギー、物質、欲望、思想の多様性をもとにして、主体というものがどのようにつくられていくのか」(Foucault 1997=2007:31)を問題にしな⁽¹⁾ければならないと言っている。本稿では、このフーコーの発言にあるような主体の構築が、世論調査に関して言えばどのようなものであるのかについて考える。ただし、主眼はこれまでに知られている世論調査に対する懐疑的な考え方をこの発言に沿ってとらえ直すことにあり、フーコーの言う「多様体」を網羅的に分析することを目指したものではない。

「世論調査」以前に、そもそも「世論」自体、従来から構築物の側面が

意識されてきた。ガブリエル・タルドによれば、世論はもともとマスメディアによって可能になったもので、それが世論を担う「公衆」と身体的接触を前提とする「群衆」との違いであった(Tarde 1901=1989)。ウォルター・リップマンの『世論』(Lippmann 1922=1987)はいわゆる「ステレオタイプ」を最初に論じたものとしてよく知られているが、その議論が続いて、世論がどのように構築されるかが詳しく論じられている。個々人の多様で移ろいやすい一時的なイメージの混合物から、どのようにして結晶としての「世論」が取り出せるのか。リップマンが答えるキーワードは「象徴」である。たとえば国際連盟を嫌う人と、ウッドロウ・ウィルソン大統領を憎む人と、労働者階級を恐れる人がいた場合(Lippmann 1922=1987: 下巻28)、3人が憎んでいるものの対極にある象徴的な存在を何か見つけることができれば彼らを団結させることができる。この例のなかでリップマンがあげる象徴は「アメリカニズム」というものであるが、これは意味内容が空虚なもの例としてあげられている。象徴記号が指し示す何らかの実体が人々を結びつけるのではなく、実質的に何も表さない象徴によって集的に共有される世論が作り上げられると言う。リップマンの立場は極めて構築主義的なものである。ここでのリップマンの説明によれば、世論は個々人の利害関心から自然に出来上がるのではなく、人為的な操作を介して構築されるものである。こうした操作を経て、世論は実際に社会で機能するエージェントとなる。

世論調査は、世論を構築する手段の1つであるから、人々が、個々人ばらばらにではなく、集団として主体的に特定の意見を持っているというように読まれる。そのとき読み手がいそしんでいるミクロな作業を、世論の主体を構築する作業として記述してみたい。

2 回答を「意見」として読むこと

まず、『社会学の社会学』に収められたピエール・ブルデュエの講演記

録「世論なんてない」の世論調査批判を見てみよう。冒頭でブルデューは、世論調査が暗黙の裡にかかわっているという公準をあげている。それらは要約すれば次の3つにまとめることができる(Bourdieu 1984=1991:287-288)。

1. どんな世論調査でも、誰もが何らかの意見もちうるということ、誰でもそうしようと思えば簡単に意見を作ることができるということ、これを前提にしている。
2. すべての意見はどれも優劣がない等価なものだと考えられている(実際には、現実的な力をもたない意見もある)。
3. ある問題については合意が存在していて、それが質問されて当然であるという同意がある。

ここに見られる公準は、フランスの当時の世論調査機関を念頭にあげられたものだが、⁽³⁾社会調査を行なっている者が、多かれ少なかれ暗黙の裡に前提にしている。この講演での主な主張は、1つには、どんな問題も立場や状況によって意味が全く異なるから、それをひとくくりにして集計してはならないということであり、したがってそのように集計している当時の調査機関は批判されるべきであるというものである。ブルデューはこれに対し、独自の問題構制をもち、対象者の状況に応じて質問をする研究センターを立ち上げている。社会学などを背景に個々の問題に応じて質的な配慮をする研究センターと対比することで、政治の道具として機械的に集計する単なる調査機関のイデオロギーを明らかにするというのがここでの主旨である。しかし、おそらく現在でも、当時の「世論調査の調査機関」的な方法で実査・集計された世論調査は多いであろうし、逆に「研究センター」的な視点で考えられた方法でも、「調査機関」的な集計が紛れ込んでいる可能性は否定できないであろう。そして、その可能性がゼロでなければ意味がないというわけでも、おそらくない。そうすると、これらの公準は、「研究センター」的な調査も含め、ある意味で普遍的なものである

とも言える。何にしろ、世論調査の結果から意味ある情報を取り出すには、回答者がここに書かれているような意味で「意見」をもたなければならないからである。

そこでここでは、ブルデューが言う公準を、回答者が、つまり世論調査の主体がどのようなものであるべきかを表わしているものとして見てみたい。これによると、回答者は調査が提供するテーマに対し、何らかの、しかも意味のある意見をもっている、あるいは少なくともその内容を理解したうえで述べることができる、ということになる。

このような指摘をするということは当然ながら、回答者が必ずしもそのような意味で主体的ではないということを含意している。何らかの事柄に意見を、あるいは少なくとも実質的に意味のある意見をもつことができない者が調査対象者の中に含まれているということは、全く不思議なことではない。

ブルデューの講演とほぼ同時期から盛んに論じられていた文学における主張と並置して考えてみよう。文学はそれまである思想(意図)⁽⁴⁾をもつ「作者」の所産として、つまり「作品」として読まれてきたが、そうではなく多様な文化的言語活動に由来する引用の織物(テキスト)として読む、というような主張である。テキストを1つの思想に回収せず、還元不可能な複数性をもつものとして読むという読み方と、回答が記された調査票を回答者の意見に回収せず、個々の回答者や調査会社の状況や政治的利害をふまえるという読み方との間には、対象物(テキスト、調査票)を主体の産物として見ないという共通点がある。

他方、世論調査に主体を付与する作業は、文学に作者を付与する作業と比べると、より明示的に決められた、具体的な手順に従っているという相違点もある。ブルデューは、公準1(誰もが何らかの意見をもちうる)に関連する具体的な作業として、無回答の扱いに言及している(Bourdieu 1980 = 1991 : 290-291)。それによると、(調査会社の)世論調査の回答解釈は無回答を無視することから成り立っているが、無回答には重要な情報が含まれて

いて、それはある人たちにとっては意味のある質問が別の人たちにとって意味のないものであるというようなことで、要するに回答者の状況に関係なくすべての回答をひとくくりにして集計してはならないという結論と結びつく。ただしここでも先ほどと同じように、無回答を主体の構築と結びつけて理解することができる。無回答は先の公準のいずれにも当てはまらず、主体としては表象できないから、これを排除するという意味においてである。

3 主体の失効

前節では、回収された調査票を特定の手順に従って読むことで、集合的で主体的な意見という表象が作られるということを論じてきた。しかし逆に、真正の主体を反映していないものとして世論調査を読むこともある。

たとえば、読み取られたある意見をポピュリズムの帰結であると批判する場合、それは世論であるには違いないが、他のある意見(世論)と比べて劣った意見、あるいは場合によって十分に主体性をもっていない意見であるという含みがある。

このような読み方は新しいものではない。日本語では「輿論」(よろん)と「世論」(せろん)⁽⁵⁾が区別されていた時期があった(佐藤卓己 2003; 2007; 2008; 宮武 2003; 岡田・佐藤・西平・宮武 2007など)。両者の語義が一貫していたかどうか、また常に截然と分けられていたかどうかは別として、理性的・感情的、集団的・個人的という2つの対立軸があるとすると、おおむね、「輿論」は理性的・集団的の側に、「世論」(せろん)は感情的・個人的の側に、それぞれ当てはまる。「輿論」は集合的な政治的圧力と認識される一方で、「世論」(せろん)は雑多で混沌とした意見の寄せ集めとして見下される概念だ⁽⁶⁾った。「輿論」と「世論」(せろん)のような位階秩序を導入するとき、それは前者に真正の主体という位置づけを与えるのに対し、後者には主体であるともないとも言えるような両義的な位置づけしか与え

ないことを含意する。

また、このような区分とも関連するが、もっと根本的に「主体」という表象そのものの失効を考えることもできる。ここまで主体の構築と世論調査との関係を論じてきたが、「主体」という表象は、次に述べるように歴史的なものである。したがって、こうした読み方は早晚失われるか、あるいは少なくとも何らかの形で変質する可能性もある。

小幡正敏は、近代の産物である「社会」という表象が、徐々に揺らぎ始めていると言っている(小幡 2007)。もともと社会調査は、18世紀から19世紀中ごろに生まれた「社会」という表象と不可分であった。それ以前の統計調査、たとえば政治算術学派のそれは、対象から独立した恣意的な記号の体系を作り上げることに腐心していた。これに対し、19世紀に始まる社会調査は、記号=データの背後に「社会」なるものがあることを想定し、それを読み取ることにより力が注がれようになった。ところが、このような図式は1960年代終わり頃から変化し始め、「社会的なもの」の消失が語られるようになる。この変化の典型は逸脱者管理に見られる。かつては、逸脱者を個人としてとらえ、教育や訓練をほどこしながらノーマルな存在へと作り変えることが考えられた(規律訓練型管理)。しかし、このような管理は政府にとってたいへん高負荷なので、それが維持できなくなると、逸脱者をひとまとめのリスク・グループとしてとらえ、リスクの要因と程度に応じて確率的に対処することがめざされるようになった(保険技術型管理)。この逸脱者管理に見られるように、「社会的なものの消失」とともに失われているのは、人々を個人、つまり「主体」としてとらえる考え方である。

また、パク・カブンは、より直接的に「主体」の失効を論じている(パク 2014=2016)。パクは、近代の国民国家が利権と宗教をめぐる内戦の「恐怖」によって強いられた契約の産物であることを明らかにしたホップズの『リヴァイアサン』をもとに、近代の「主体」が恐怖という感情を介して成立した経緯を論じる。しかし、パクは今日においてはリヴァイアサンが没落し、思考や意志を介さない「反応社会」が到来していると言う。

たとえばSNSのコンテンツを分析してそこから「世論」を読み取るという方法は、主体を完全に失効させているとは言えないまでも、感情的な(前節の分類でいえば「世論」(せろん)的な)世論を対象にしていることになる。また、テレビ番組「ランキング依存が止まらない——出版不況の裏側」(NHK『クローズアップ現代』2008年6月4日放送)で取り上げられていた「ランキング依存」は典型的に「反応社会」的な社会調査の読み方を反映したものと考えられる。番組の枠組みでは、本の買い手が本を選ぶときに「売り上げランキング」に過度に依存しているため、ごく一部の本だけが売れることになり、それが出版不況の一因になっている。ランキングの読み手は、登場する本をなぜ買ったかを想像する必要がない。つまり買い手を「主体」として読む必要がない。ここで扱われている調査はいわゆる世論調査そのものではないが、思考や意志をふまえずに人々の動向を理解し、その理解によって実際に人々が影響を受ける例として受け止めることができるだろう。

本稿では、世論調査における主体の構築をめぐるいくつかの論点を提出してきた。世論という概念は今後どのように変化するかはわからないが、しばらく推移を見守っていきたいと思う。

注

- (1) 引用は、邦訳のある文献に関しては、原則としてそれによっている。ただし、特に注記せずに訳文を変えている場合もある。
- (2) 主に第5部「共通意志の形成」。
- (3) バトリック・シャンパーニュは、当時のフランスの世論調査状況を詳細にまとめ、分析している(Champagne 1990=2004; また巻末の訳者解説も参照)。第5共和制が成立すると、強大な権限をもつ大統領が国民の直接選挙で選ばれるようになり、選挙戦が大きなメディアイベントとなった。メディアに世論調査のアイデアを出していたのは複数の調査機関である。彼らは基本的に商業主義の立場にあるが、そこに専門家である「政治学者」が関わり、科学的権威を与えていた。ブルデューやシャンパーニュは彼ら「政治学者」と対立し、彼らが背後にもつイデオロギーを分析している。
- (4) ブルデューの「世論調査なんてない」のもとになった講演の日付は1972年

1月(Bourdieu 1980=1991:287)。文学での議論について、ここでは罗兰・バルトの「作者の死」、「作品からテキストへ」を念頭においているが、これらの初出は1968年と71年(Roland Barthes 1968=1979:1971=1979)。また、同じく文学における作者を論じたミシェル・フーコーの「作者とは何か?」は、1969年2月22日の会合で話されたもの(Michel Foucault 1994=2006:371)。

- (5) 「せいろん」と読む場合もあったが、以下、輿論と対置される場合は「世論」(せろん)と表記している。
- (6) しかし終戦後、当用漢字表の公布によって「輿」の文字が廃され、表記が「世論」に移行していき、読みも「世論」と書いて「よろん」と読むようになっていった(宮武 2003:70)。その結果、戦前にはあった意味論的な区別もなくなっていった。
- (7) 日本の「輿論」／「世論」(よろん)の対比で言えば、前者が後者を介して生まれたことを論じているとも言える。

参考文献

- Barthes, Roland, 1968, "La mort de l'auteur", *Manteia*, 5: 61-67. (=1979, 花輪光記, 「作者の死」『物語の構造分析』みすず書房, 79-89.)
- , 1971, "De l'œuvre au texte", *Revue d'esthétique*, 3: 225-232 (=1979, 花輪光記, 「作品からテキストへ」『物語の構造分析』みすず書房, 91-105.)
- Blumer, Herbert, 1948, "Public Opinion and Public Opinion Polling", *American Sociological Review*, 13(5), 542-549. (=後藤将之訳, 1991, 「世論と世論調査」『シンボリック相互作用論——パースペクティヴと方法』勁草書房, 255-272.)
- Bourdieu, Pierre, 1980, "L'opinion publique n'existe pas", *Questions de sociologie*, Paris: Les éditions de minuit, 222-235. (=小松田儀貞訳, 1991 「世論なんてない」, 田原音和監訳『社会学の社会学』藤原書店, 287-302.)
- , 1987, "Le sondage, une "science" sans savant", *Choses dites*, Paris: Les éditions de minuit, 217-224. (=石崎晴己訳, 1991, 「世論調査, 学者なき「科学」」『構造と実践——ブルデュー自身によるブルデュー』藤原書店, 291-315.)
- Champagne, Patrick, 1990, *Faire l'opinion: Le nouveau jeu politique*, Paris: Les éditions de minuit. (=宮島喬訳, 2004, 『世論をつくる——象徴闘争と民主主義』藤原書店.)
- Ewald, François, 1986, *L'État providence*, Paris: Bernard Grasset.
- Foucault, Michel, [1969 =] 1994, "Qu'est-ce qu'un auteur?", *Dits et écrits 1954-1988: I 1954-1969*, Paris: Édition Gallimard, 789-821. (=2006, 清水

- 徹・根本美作子訳, 「作者とは何か」, 小林康夫・石田英敬・松浦寿輝編『フーコー・コレクション2 文学・侵犯』(ちくま学芸文庫)筑摩書房, 371-437.)
- , 1997, “Cours du 14 janvier 1976”, *Cours au collège de France (1975-1976): Il faut défendre la société*, Paris: Gallimard; Seuil, 15-27. (=石田英敬・小野正嗣訳, 2007, 「1976年1月14日」『ミシェル・フーコー講義集 成6 社会は防衛しなければならない——コレージュ・ド・フランス講義 1975-76年度』筑摩書房, 25-43.)
- Lippmann, Walter, 1922, *Public Opinion*, New York: The Macmillan. (=1987, 掛川トミ子訳, 『世論』(上・下)岩波書店.)
- 宮武実知子, 2003, 「『世論』(せろん/よろん)概念の生成」津金澤聡廣・佐藤卓己編『叢書現代のメディアとジャーナリズム6 広報・広告・プロパガンダ』ミネルヴァ書房, 56-74.
- , 2007, 「1980年代以降の『世論』研究」, 岡田直之・佐藤卓己・西平重喜・宮武実知子『輿論研究と世論調査』新曜社, 189-217.
- 西阪仰・川島理恵, 2007, 「曖昧さのない質問を行なうこと——相互行為のなかの情報収集」田中耕一・荻野昌弘編『社会調査と権力——〈社会的なもの〉の危機と社会学』世界思想社, 115-37.
- 小幡正敏, 2007, 「保険と調査——もう一つの社会調査史」田中耕一・荻野昌弘編, 『社会調査と権力——〈社会的なもの〉の危機と社会学』世界思想社, 45-64.
- 岡田直之・佐藤卓己・西平重喜・宮武実知子, 2007, 『輿論研究と世論調査』新曜社.
- バク・カブン, 安夫(訳), 2014=2016, 「変身するリヴァイアサンと感情の政治」『ゲンロン』3, 234-249.
- 佐藤卓己, 2003, 「あいまいな日本の『世論』」佐藤卓己編, 『KASHIWA 学術ライブラリー02 戦後世論のメディア社会学』柏書房, 11-24.
- , 2007, 「日本型『世論』の成立——情報宣伝から世論調査へ」, 岡田直之・佐藤卓己・西平重喜・宮武実知子『輿論研究と世論調査』新曜社, 85-136.
- , 2008, 『輿論と世論——日本の民意の系譜学』(新潮選書)新潮社.
- Tarde, Gabriel, 1901, *L'opinion et la foule*, Paris: Félix Alcan. (=稲葉三千男訳, 1989, 『世論と群衆 [新装版]』未来社.)
- Wagner, Peter, 1994, *A Sociology of Modernity: Liberty and Discipline*, London: Routledge.
- 吉田徹, 2011, 「世論は存在しない? ——『世論調査ポリティクス』の功罪」, *Synodos: Academic Journalism*, (2016年12月23日取得, <http://synodos.jp/politics/1594>).

